

友人同士の相談談話における構造分析

—聞き手の発話行為に注目して—

佐藤 綾香（江原外国語高等学校）

要 旨

本稿は友人同士の相談談話を対象とした構造分析である。相談談話の展開、聞き手の配慮に焦点を当て、分析、考察を行った。その結果、次のことが明らかになった。相談談話には、一定の展開パターンがあり、談話ごとに特徴がある。そして、相談談話における聞き手の発話行為は単に「問題解決」のみに志向しているのではなく、相談者の「心情的負担の軽減」にも志向していて、相談者への聞き手の配慮と言える。また、性差も観察され、男性は相談者との距離を保持するために冗談を用いることを好み、根本的問題解決を中心に談話を展開する問題解決型、女性は相談者の心情的負担を軽減することを目的に談話を進める不安解消型の傾向にある。

キーワード： 相談談話、構造分析、発話行為、聞き手の配慮、男女差

1. はじめに

「相談」とは問題解決のために話し合ったり、他人の意見を聞いたりすることである。2007年度の中央調査報の「ストレスに関する世論調査」により、日本人の約6割が日々、ストレスを感じ生活していることが分かった。そのストレス解消法として、「友人に会って、話をする」という回答が最も多く、ストレス社会と言われる現在の日本社会で「相談」という行為が良い人間関係、コミュニケーションを築く、1つの役割を果たしている。相談場面に出くわすのは、なにも日本人だけではない。日本で生活をする外国人もその対象だろう。日本語学習者に日本語母語話者との相談場面についての経験を尋ねたところ、日本語学習者も日本語母語話者から相談を受けていることが分かった。学習者からは「相手の悩みを真剣に聞いているつもりだったが、相手が相談の途中で話をやめてしまい、なんだか嫌な気分だった」、「相手が何を求めているのか分からなかった」といった声が聞かれた。「依頼」や「勧誘」など様々な言語行動の様相が明らかにされ、日本語教育に応用されている中、「相談」に関する研究はまだまだ少ないことが現状である。明確なタスクの達成がなく、相談者に配慮した聞き手にとって高度な言語行動だからこそ、「相談」の様相を明らかにする必要があるのではないだろうか。

「相談」に関する先行研究が少ない中、熊取谷・村上（1992）、柏崎・足立・福岡（1997）などによる相談談話に見られる助言、提案などの発話行為に注目した研究、鈴木（2002, 2003）による相談談話の構造に注目した研究、星野（2005）による相談談話に見られるポライトネスに注目した研究により、少しずつ「相談」の様相が明らかになってきた。しかし、これらの研究が対象とする相談談話はテレビ、ラジオの相談番組や研究者によって、あらかじめ相談の話題が決められているものであり、現実社会とは遠いものと言えよう。

そこで、本稿ではストレス解消法の1つであり、だれもが出くわすであろう親しい友人同士の相談場面を対象に会話分析の手法を利用し、日本語母語話者の相談談話の構造展開、相談の聞き手の発話行為を中心に分析し、考察することを目的とする。そして、「相談」という言語行動を構造展開と聞き手の配慮という観点から、日本語のロールプレイ教材、会話教材に応用するための基盤になることを目指す。本稿の課題は以下のように設ける。

①友人同士の相談談話の構造を分析し、本研究における相談談話の談話展開の傾向と構造部の特徴を探る。

②相談談話の主要部に見られる聞き手の発話行為とその目的を分析し、相談談話の主要部の構成要素を抽出する。

2. 本稿における「相談」の定義

現代の「相談」の在り方を把握するため、予備調査として大学院生、社会人それぞれ2名に「最近、友人にどのようなことを相談したか」、「相談相手にどのような対応を求めたか」という2点についてインタビューを行った。インタビューの結果、大学院生からは主に学校生活、人間関係、将来について、社会人からは人間関係、将来について友人に相談するという答えが返ってきた。また、両者から相談を行う際、相手に求める対応として、「話を聞いてほしい」「自分の主張を理解してほしい」などの声が聞かれた。これにより、相談を行う際、相談者は決して問題解決のみを望んでいるのではなく、心情的負担の軽減、解消を目的とする場合もあることが分かった。そこで、本稿では予備調査の結果を配慮し、柏崎・足立・福岡（1997）の参加者が同じ目標に向かい問題解決を目指す「と」相談、鈴木（2002, 2003）の相談者が専門家に問題解決のために行う「に」相談とは区別し、横と横の繋がりにおける相談を新たに「横」相談と名づけ、定義を以下のよう規定する。

【横相談】

相談の聞き手が相談者の「不安・不満」を認知した上で、相談者の問題解決、心情的負担の軽減を目的に行われる言語行動。

3. データの概要

3.1. 調査方法

本稿では、日本語を母語とする大学生、大学院生10組（男性5組、女性5組）計20名を会話の参加者とする。本稿の目的に合わせ、会話の参加者ペアは同性の親しい友人同士という条件で統制した。ペアの関係性については会話を録音する前に確認した。そして、会話参加者の許可を得た上で、二者の会話を15分間前後、ICレコーダーで録音した。録音場所は会話参加者が気兼ねなく話せることを考慮し、会話参加者に話しやすい場所を指定してもらった。自由に会話をさせると、会話に相談場面が現れないことも考えられた。そのため、研究の目的に合わせ、「最近の嫌なこと、落ち込んでいること」というトピックを中心に話をしてほしいと伝えた。「最近の嫌なこと、落ち込んでいること」がトピックであれば、自然に相談場面が現れやすいと考えたためである。会話の切り出しは会話の参加者たちに任せ、普段通りに会話するよう指示を出した。録音した会話は宇佐美(2007)「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：以下BTSJ）」に従い、文字化した。

3.2. 本稿における相談談話

本稿では、本稿における「横相談」の定義に従い、「相談談話」を以下のように規定した。

【相談談話】

相談者が「不安・不満」を表出し、聞き手が相談者の「不安・不満」を認知した上で、相談者の問題解決、心情的負担の軽減を目的とし後続する談話。

「会話」「談話」の定義はザトラウスキー(1993)に従い、ICレコーダーの録音が始まったところからICレコーダーのスイッチを切るところまでを一連の会話と見なし、会話の1単位とした。つまり、10組の参加者から10の会話を採取したことになる。そして、本稿の「相談談話」の定義に従い、会話の中から相談談話を抽出した。相談談話の抽出基準は以下の通りである。

【相談談話の抽出基準】

- ①相談者から相談を行うための場を確保する切り出しが観察できる。
- ②相談者から「不安・不満」の表出が観察できる。
- ③相談の聞き手が相談者の「不安・不満」に対して、「はいはい」、「そうなんだ」のような下降調のイントネーションのあいづちを用いた理解、または「大変だね」のような評価が観察できる。
- ④上記した抽出基準①②③に後続し、長い沈黙、話題の放棄や話題の転換が観察できる。

今回の調査では10の一連の会話から20の相談談話が抽出された。つまり、1つの会話を複数の相談談話が含まれているため、会話参加者のペアにより談話数が異なる。会話数と相談談話数の内訳は以下の通りである。

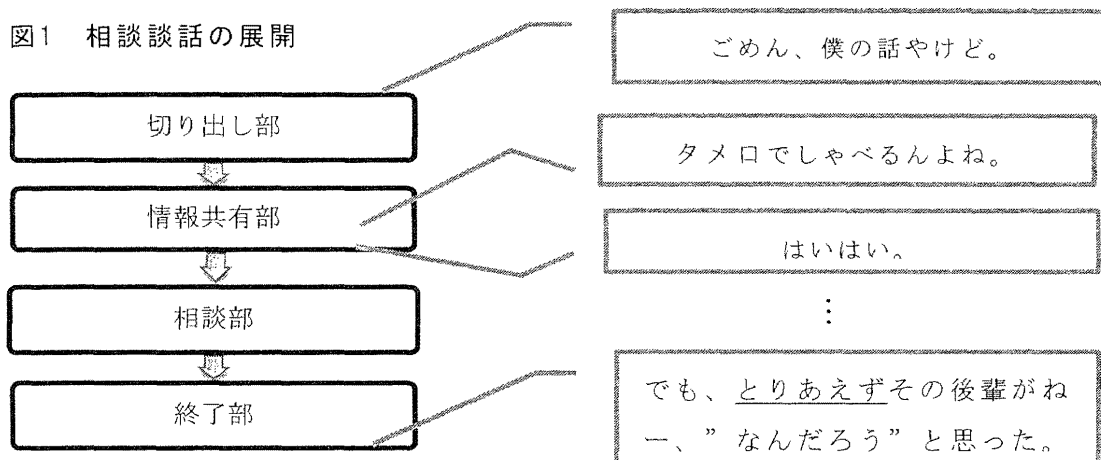
表1 会話と相談談話のデータ数

	男性	女性	合計
会話数	5	5	10
相談談話数	10	10	20

4. 相談談話の構造

20の相談談話を観察すると、トピックを開始する者が会話の主導権を握るという会話の秩序（メイナード1993）に従い、相談談話は相談を切り出した相談者が会話の主導権を握り、進んでいく。そして、【切り出し部】【情報共有部】【相談部】【終了部】の話段の順に展開する傾向が見られた。この4つの話段は会話参加者の目的により、分別した。

図1 相談談話の展開



4.1. 切り出し部

【切り出し部】とは相談者が相談を始めるために、自分が発話する場を作る場所である。相談者が話を切り出し、それに聞き手が理解を示す、または発話の場所を提供する場を【切り出し部】と認定した。【切り出し部】では、2つのパターンが観察された。1つは断片1のようにTransition-Relevance Place（以下TRP）において相談者が自ら発話を確保するパターンである。TPRとは、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)によって提唱された参加者が話者交替を行うことが可能な場所のことである。断片1ではQがライン01、02で自分がこれから話すことを宣言し、相談の切り出しを行っている。それに対し、Rは「いいよ」と許可を出し、発話の場所を提供している。

（断片1 相談者：Q 聞き手：R）

- 01 Q あの一、あれ。
- 02 Q 最近 /沈黙 2秒 /ごめん、僕の話やけど。
- 03 R いいよ。

もう1つは相手の発話を受けて、相談者が相談の場を確保するパターンである。断片2ではIのライン01、02の発話を受けて、Jがライン03で情報要求を行っている。その情報要求に対し、Iは何か問題があることを笑いで示している。次のターンにJからの発話はお出でならず、Iにターンを譲っていることが見える。TRPにおいて、相談の聞き手が相談者にターンを譲ったことになる。

（断片2 相談者：I 聞き手：J）

- 01 I 私も、D(彼氏) 来週誕生日なんだよね。
 02 I 何も買ってない。
 03 J /沈黙 1秒/良好ですか?。
 →04 I いや…ふふふ(笑い)。
 05 I え、さっきもなんか、また言い合いになって終わっちゃった。

4.2. 情報共有部

【情報共有部】は相談者と相談の聞き手が相談者の抱える「不安・不満」、その問題源や出来事についての情報を共有する場である。ここでの参加者の目標は相談者と聞き手の情報の差を埋めていくことだ。【情報共有部】は【切り出し部】に後続し、相談者からの情報提供から始まる。情報共有部の終了箇所は北口(2010)を参考にし、相談者の評価の表出、相談の聞き手の問題に対する評価や状況の把握を示す発話を認定基準とした。【情報共有部】にもまた、【切り出し部】同様、2つのパターンが観察された。1つは相談者が先行して情報共有する先行型(断片3)である。断片3では、聞き手であるMはあいづちを用いて理解を示しながら、TRPにおいてNに情報を提供する発話の場所を与え続けていることが分かる。

(断片3 相談者：N 聞き手：M)

- 07 N 月曜日の深夜ー(ほう)、あのAプロジェクトのことをやってるじゃない?。
 08 M ほう。[返事]
 09 N んで、あの、定員40名ーに、み、みんなメール送ってー(うん)、ちゃんと連絡が行ってるかどうかー(うんうん)なんか、メールを、当選メールを送っててもー(うんうん)読んでくれてなかったらー、
 10 M あーあー確かに。
 11 N “あ、外れたんだ”と思って予定入れられちゃうと困るからー。
 12 M うんうんうんうん。

二つ目は聞き手との相互行為により情報共有する相互行為型(断片4)である。Bは金銭管理がなっていないという情報を提供してはいるが、金銭管理という抽象的な概念から、Aはライン08でBに具体的内容に迫る情報要求をしている。それに対し、Bが応答することで、2人の相互行により情報の差が埋まっていくのが見える。

(断片4 相談者：B 聞き手：A)

- 03 B “自分、金の管理がなっていないな”って思う。[笑いながら]

- 04 A あーー。
- 08 A じゃあ、つまり、しゅ、こう、いきなり月末に金欠になるとか、やっぱ、<そう、そういう><{>,,
- 09 B <そうそう、あるある><{>。
- 10 B 月末にいきなりなるとかね（うーん）、結構あってー。
- 11 B なんか今、/沈黙 1秒/やっぱり今、自分の懐にあるお金の、まあ、8割くらいはもう親の一仕送りにー,,
- 12 A うんうんうん。

また、【情報共有部】は会話参加者同士の背景知識によって、【情報共有部】の長さが大きく変わる。聞き手に背景知識があるトピックの場合は短く、ない場合は長くなる傾向にある。

4.3. 相談部

【相談部】は相談談話の主要部と言える場所で、【情報共有部】に後続し始まる。ここでは 相談内容に対する問題解決、相談者の心情的負担の軽減を目的とする。【切り出し部】、【情報共有部】と違い、統一したパターン形式が観察されなかった。しかし、他の部と違い、「助言」「提案」など様々な聞き手の発話行為が観察された。そのため、パターンを探るのではなく、相談部の構成要素を明らかにした上で1つ1つの聞き手の発話行為を質的に分析し、【相談部】の様相を探る必要性が浮上した。詳しい分析については5.2で触れる。

4.4. 終了部

【終了部】は「会話参加者による話題の放棄」、「あいづちの繰り返し」「ソ系の指示表現」、「話をまとめる機能を持つ接続表現」、「長い沈黙」が表出し（鈴木1995）、次の話題へ転換する場である。ここでも、【切り出し部】【情報共有部】同様に二つのパターンが観察された。1つは相談者が自ら相談を放棄するもの、もう1つは相談者と聞き手の相互行為によって談話を終了させようというものである。断片5は相談者が談話を放棄する例である。彼氏について相談していたIと聞き手Jによってライン75-80まで2人の話者交代により相談部が継続しているが、Iが「ま、いいや。（ライン81）」と突然、相談を放棄している。そのIの志向性を配慮し、Jからはその後、発話が無く談話が終了している。

（断片5 相談者：I 聞き手：J）

- 75 I /沈黙 1秒/しかも、誕生日の日とかも普通にパチンコ行っちゃうしさ。

76 J はあー。[ため息]
 77 J /沈黙 2秒/そういう人、そういうことってあるんだね。
 78 I あるんだね。
 79 I 私、今までそんなことなかったから、分かんないけど…。
 80 J うーん。
 →81 I ま、いいや。
 82 /沈黙 5秒/

断片6は相談者と聞き手の相互行為による終了部の例である。ライン60のAの発話に対し、Bは理解を示している。その後、Aからの新たな情報はなく、ライン62、64でAは話をまとめ、それに対しBも理解を示している。それに続き、Aからはあいづちが表出し（ライン66）、Bもそれに理解を示すだけである。このことからAもBもこの談話が終わりに向かっていることを察知していて、この2者間の志向性により、談話が終了したと考えられる。

(断片6 相談者：A 聞き手：B)

60 A 結局、ね、やる量ってのは/沈黙 1秒/あんまり（うーん）、あんまりふれないから、あんまり減らない。
 61 B なるほどね。
 62 A のかなーっていう。
 63 B うーん、そっかー。
 64 A ってことはあるかな。
 65 B なるほど。
 →66 A うーん。
 →67 B そっか。
 68 /沈黙 8秒/

5. 相談部における聞き手の発話行為と構成要素

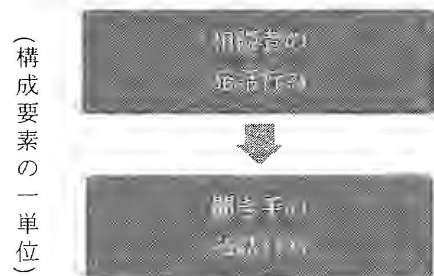
4.3で述べた通り、相談談話の主要部である【相談部】では、際立ったパターン形式が見られなかった。しかし、様々な聞き手の発話行為が観察できたことから、パターン化を試みるのではなく、構成要素に着目し、さらに分析を進めた。

5.1. 構成要素の概念と連鎖の分類基準

【相談部】の構成要素を抽出するために、「行為連鎖」の概念を用いた。「行為連鎖」とは発話行為の繋がりである。相談談話は相談者が主導権を握り展開するため、基本的に「相談者の発話行為」に対し、「聞き手の発話行為」が連なっていると考え

られた。そこで、「相談者の発話行為+聞き手の発話行為」を1つの連鎖の始まりとして、「聞き手の発話行為により生じた相互行為」の終了までを一連の連鎖とみなした。

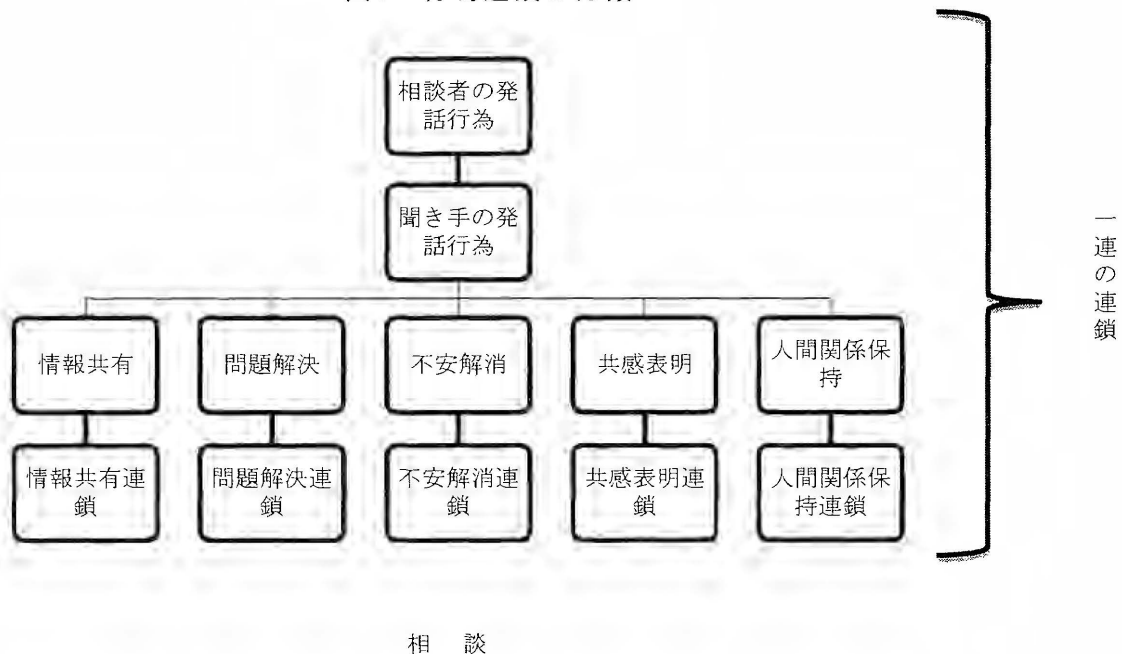
図2 一連の連鎖の概念



5.2. 相談部の構成要素

【相談部】から抽出した連鎖を相談者の発話行為に対する聞き手の発話行為の目的を基準に【情報共有連鎖】【問題解決連鎖】【不安解消連鎖】【共感表明連鎖】【人間関係保持連鎖】の5つに分類した。

図3 行為連鎖の分類



5.2.1. 情報共有連鎖と聞き手の発話行為

【情報共有連鎖】は相談者の不安・不満の問題源を解決するために、聞き手が相談者から問題源に関する情報を得ることを目的とする連鎖である。情報共有を目的とする聞き手の発話行為には「情報要求」がある。「情報要求」を行うことで、①相談者の現在の状況を明らかにすること、②問題の根本を明確化・具体化すること、③現在

の状況と未来の状況を繋げることが可能である。

① 相談者の現在の状況を明らかにする

相談者の不安・不満の問題源に対して、相談者がどのような対応、対策を取っているのか状況確認することで、聞き手は相談者の状況を把握することができる。Tは断片7のライン73で「あの、網戸に『虫来ない』とかやらないの？」とSが現在までに殺虫剤を使ったかどうか、対応策についての情報を要求している。Sはそれに対し、殺虫剤を買って使ってみたがうまくいかなかったことを説明している（ライン74）。この情報要求により、Sが現在まで対応してきた状況が把握できる。

（断片7 相談者：S 聞き手：T）

- 71 S だから、窓開けれんからさー。
72 S めっちゃ虫おってさー、やばかったわー、あれは。
→73 T あの、網戸に『虫来ない』とかやらないの？。
74 S そう、やって、そう、俺、買ってさ、やったんよ。
75 T うん。

② 問題の根本を明確化・具体化すること

相談者が抱える不安・不満や問題源に迫ることで、抽象的な不安・不満や問題を明確化・具体化することができる。断片8がその例である。Oは就職活動の不安を述べてきた。それに対し、Pはライン73、79でOが考える就職活動における不安を具体的に示して、情報要求している。Oからは「そうだよね」「確かにね」という強い同意が表出されている。これは、Pにより問題が具体化されたことで、O自身の不安に対する理解が深まったと言える。

（断片8 相談者：O 聞き手：P）

- 73 P その…不安ってのは“自分の第一希望が叶わないって思うから不安なのかな？”っていう。
→74 O あーそうだよね。
75 P なんか、あるじゃん？。
76 P お互い違うかもしれないけど、“ここ行けたらいいな”みたいな憧れのところがさ、いくつか。
77 O そうだね。
78 P で、そこ全部だめになったときにー、今まで見なかったところを見るわけじゃん。
→79 P “そうなっちゃうかもしれないっていうのが不安なのかな？”って、正直。
→80 O 確かにね。
81 P うん。

③ 現在の状況と未来の状況を繋げる

不安・不満の問題源がなくなった場合、また現在の状況が進んだ場合、どのようなビジョンがあるのか相談者に聞くことで、現在の状況から未来の状況へ進むために、現在何をすべきか、またこれからの課題を確認できる。断片9では、Pが実験がうまくいった場合、どのように対応したかと質問している（ライン10）。Oからの具体的な応答が表出されなかったため、Pはライン16で未来の行動についてさらに言及している。Oはそれに対し、次の行程について説明し、ライン22、23で未来に行程についての不安の言及、また、ライン24でサイズを変えなければいけないという現在、行わなければいけない課題について述べている。現在の状況と未来の状況を結び付けることで、現在の課題を明確化できるだけでなく、相談者の視点を未来に向けることができる。

（断片9 相談者：O 聞き手：P）

- 10 P 仮にさ、仮にうまくいったら、どうしたつもりだったの、Oは？。
- 11 P それも心配してたじゃん。
- 12 O うん、そうだね。
- 13 P うまく行って、〈得点が〉〈〉、
- 14 O 〈まあ〉〈〉それも、
- 15 O ま、そうそうそう。
- 16 P その次かその次かに訪れるわけじゃん。
- 17 P とりあえず、機能、ま、思った通りに動いて、〈あの〉〈〉、
- 18 O 〈評価〉〈〉、まあ、そうだね。
- 19 O それに対する、
- 20 P あー評価。
- 21 O 評価をするんだけど。
- 22 O その評価がうまくいってなかった場合は確かに。
- 23 O うまくいってなかったら、これもっと不安だったね。
- 24 O これ、まだもう1回サイズを変えるっていう（あー）だけの課題になってるから、ちょっともったいない1か月間になるけれどもー。

5.2.2. 問題解決連鎖と聞き手の発話行為

【問題解決連鎖】は相談者の不安・不満の問題源を解決することを目的とする連鎖である。問題解決を目的とする聞き手の発話行為には、「情報提供」「主張」「行動の促し」がある。断片10は聞き手が「主張」を行った例である。相談者が抱える不安・不満の問題源に対して、聞き手が自らの意見を述べることで、相談者とは異なる視点から新しい認識を与えることができる。ライン63でNは違うクラスの学生がコー

ヒーを落としたのではないかという主張をする。Mと異なる視点からのNの意見からはMに新たな認識を与えようというNの志向性が観察される。

(断片10 相談者：M 聞き手：N)

- 60 N 分かんない。
- 61 N もし、1つ…フォローするとすれば。
- 62 M うん。
- 63 N もしかしたら、そのクラスの人が落としたんじゃないのかもしれないけど…。
- 64 M だって、でもそのクラス…、全部埋まるから。

5.2.3. 不安解消連鎖と聞き手の発話行為

【不安解消連鎖】とは相談者の不安・不満の問題を解決するのではなく、相談者の心情に働きかけることにより、相談者の心情をやわらげることを目的とする連鎖である。相談者の不安の解消を目的とした聞き手の発話行為には、「励まし」「ほめ」「失敗談の語り」がある。断片11は聞き手の発話行為「励まし」の例である。「励まし」は相談者が抱える不安・不満を理解し、不安・不満への言及ではなく、相談者を元気づけることで、相談者の不安・不満を解消することを目的とした聞き手の行為である。断片11では、後輩に対し、サークルの中でうまく人間関係を築いてほしいと感情を強く表しながら、主張するHに対し、ライン85、86でGはサークルの状況がきつと改善し、うまくいくと励ましている。相談者が抱える問題の解決にはならないが、相談者の不安・不満を少しでも軽くしようという聞き手の志向性が感じられる。

(断片11 相談者：H 聞き手：G)

- 83 H 私ね、ほんとにね、“人間関係だけは頑張れよ”って思ってるんだよー。
- 84 G ははは。
- 85 G これからだよ。
- 86 G なんとかなるといいね。
- 87 H うーん。

5.2.4. 共感表明連鎖と聞き手の発話行為

【共感表明連鎖】は【不安解消連鎖】同様、問題解決を目指すものではなく、相談者の不安・不満に共感を示すことで、相談者の心情をやわらげることを目的とする連鎖である。【共感表明連鎖】の聞き手の発話行為には「理解」と「共感」がある。聞き手の発話行為「理解」を例にあげて、説明していく。聞き手が相談者の情報提供に対して、「理解」を示すことは一般的な会話の秩序と言えよう。しかし、聞き手が「理解」を表出することで、相談者に発話する場を与えたり、聞き手からの非同意が

表出されなかつたりすることから、結果的に相談者は不安・不満を和らげることができ。断片12でBは仕事を途中で放棄する後輩BとそのリーダーAに対しての考えを述べている（ライン111、113）。それに対し、Mはライン112、で「うん」と理解を示している。それに続き、Nは「うーん」とあいづちが表出され、TRPが可能な場所にも関わらず、Mからは発話が現れずNへのターンが提供されたと考えられる。相談者Nの情報提供にMが理解を示す形で展開が続き、相談者であるNの自分の話を聞いてほしいという志向性が強く感じられる。つまり、ここではMが理解を示すことで、NにとってはMが「話を聞いてくれている」という行為が不安・不満の軽減の手助けとなっている。

（断片12 相談者：N 聞き手：M）

- 111 N なんか超えるものがあつたらー、自分でポーンと投げないで、なんかそれが、自分のそのーコントロールに入らないで（うんうんうん）、終われるように誰かに頼むなりー、任せるなりしてほしいって話をー、Aちゃんにしておいてって。
- 112 M うん。
- 113 N だって、2人の担当の問題でもあるじゃーん。
- 114 M まあ、確かにね。
- 115 N うーん。
- 116 N Aちゃんと説明不足のところ（そうね）絶対あつたからー（うーん）、Bさんに。
- 117 N 留学生だしー、Aちゃん、そんなに言葉数多いほうじゃないんだよ。
- 118 M うーん。

5.2.5 人間関係保持連鎖と聞き手の発話行為

【人間関係保持連鎖】とは相談者との人間関係を良好に保つことを目的とする連鎖である。本稿では、良好な人間関係を保つために程度の距離感をとるという意味合いで【人間関係保持連鎖】と名付けた。【人間関係保持連鎖】の聞き手の発話行為には「冗談」がある。Brown & Levinson (1987) はポジティブ・ポライトネスストラテジーの1つに「冗談」を挙げ、親密な関係を築く機能を持つという。断片13は部屋にクーラーや暖房器具がないことを不満に思うSと聞き手Tの談話である。部屋に暖房器具がなく、冬の寒さを心配するS（ライン13、18、19）に対し、青森県出身のTがライン20、21で「青森来るか」という発話を冗談として発している。後続してSから笑いが表出していることから、Sもそれが冗談だと認知している。また、後続の談話は青森についての話題に逸れ、冗談を用いることで不安・不満から話題を変え、聞き手はそれらに対する言及を回避している。親密さを維持しながら、不安・不満に対する言及を回避したことから、「冗談」が相談者と聞き手の距離間を保つために機能していることが観察できた。

(断片13 相談者：S 聞き手：T)

- 13 S <ク、クー>{}ラーないし(うん)、恐怖したのが(うん)、あんねー暖房器具がなんか、昔のあの、なんやろ??。
- 14 T スチーム?。
- 15 S そうそうそうそう。
- 16 T 銀のやつかな。
- 17 S そうそうそうそう。
- 18 T そういう形式でさー(うん)、“やばいな、これ”って思って。
- 19 S “僕、冬死ぬんちゃうんかな”って。
- 20 T “冬死ぬ”?。
- 21 T 青森来るか?。
- 22 S ふふふふふ。
- 23 S いやいや、ちゃうちゃうちゃうちゃう。[笑いながら]

5.3. 相談部における男女差

相談部における構成要素の観察を続けると、男性の相談部と女性の相談部それぞれに異なった傾向が見えてきた。傾向を見やすくするため、各会話データにおける相談談話の相談部から連鎖の発話数を抽出し、比率化した。以下は男女の相談部における構成要素比である。

表2 男性の各相談部における構成要素比

	情報共有	問題解決	不安解消	共感表明	人間関係
談話①	23%	36%	0%	16%	25%
談話②	6%	35%	0%	9%	39%
談話③	19%	33%	0%	48%	0%
談話④	28%	5%	18%	45%	0%
談話⑤	40%	0%	0%	28%	32%
談話⑥	57%	0%	12%	22%	9%
談話⑦	15%	34%	0%	41%	10%
談話⑧	36%	28%	7%	19%	0%
談話⑨	35%	38%	10%	17%	0%
談話⑩	0%	41%	12%	47%	0%

表3 女性の各相談部における構成要素比

	情報共有	問題解決	不安解消	共感表明	人間関係
談話①	0%	11%	0%	50%	18%
談話②	0%	0%	0%	100%	0%
談話③	0%	35%	0%	51%	14%
談話④	23%	0%	0%	61%	16%
談話⑤	0%	23%	0%	77%	0%
談話⑥	0%	25%	27%	48%	0%
談話⑦	34%	10%	0%	56%	0%
談話⑧	39%	0%	18%	43%	0%
談話⑨	5%	14%	5%	76%	0%
談話⑩	0%	39%	6%	55%	0%

男性の相談部は女性に比べ、相談者の不安・不満の根本となる問題を解決することを目的とする【情報共有連鎖】【問題解決連鎖】の割合が高く、この2つの構成要素の割合が約5割を占める。また、【人間関係保持連鎖】が5つの談話から抽出され、特に談話①、②、⑤では割合が高いことから、男性に好まれる構成要素だと考えられる。つまり、男性は相談者との距離を保持するために冗談を用いることを好み、【情報共有連鎖】【問題解決連鎖】を中心に相談部を展開する問題解決型の傾向にある。

それ対し、女性の相談部は相談者の不安・不満など心情を癒すことを目的とする【不安解消連鎖】と【共感表明連鎖】の割合が高く、全ての談話において、この2つの要素が60パーセント以上を占めている。また、女性の談話の中で最も【問題解決連鎖】の割合が高い談話⑩では、聞き手から相談者に「そんな顔しないで」という発話が飛び出し、相談者がふてくされる場面も観察された。このような場面が見られたことから、女性の相談部には問題解決だけでなく、心情的負担を解消する心の癒しを目的とする行為が大きな役割を果たしている可能性がある。つまり、女性は相談者の心情的負担を軽減するために【不安解消連鎖】【共感表明連鎖】を中心に相談部を進める不安解消型の傾向にあると言えよう。

6. おわりに

相談談話には【切り出し部】【情報共有部】【相談部】【終了部】といった一定の展開パターンがあり、これは北口（2010）の「慰めの談話構造」とも一致する。負のトピックが現れた際にこのような展開パターンが取られる可能性がある。また、【切

り出し部】【情報共有部】【終了部】には統一したパターンが見られたが、相談談話の主要部である【相談部】には、そのような統一された形式は見られなかった。その代わりに、聞き手による様々な発話行為が抽出された。その発話行為の目的から【相談部】の構成要素を【情報共有連鎖】【問題解決連鎖】【不安解消連鎖】【共感表明連鎖】【人間関係保持連鎖】の5つに分類することができ、【相談部】はこの5つの構成要素の組み合わせから成る。

また、【相談部】には、性差も観察された。この性差はTannen (1990) が提唱する男女の会話スタイルの違いにも通ずる。男性は情報や事実を客観的に述べるレポート・トーク、女性は共感関係を作り出そうと心理的つながりを重視するラポート・トークを用いる傾向にあると言う。相談部においても多少なりともこの会話スタイルの違いに影響を受けていると考えられる。そして、この5つの構成要素に見られる聞き手の発話行為は予備調査で相談者が聞き手に期待する対応として挙げた「問題解決」と「心情的負担の軽減」に志向するものであることから、聞き手が相談者に配慮を示しながら、会話に参加していると主張する。

本稿では、相談談話の談話展開、聞き手の発話行為と配慮を中心に分析を行い、本データにおける友人同士の相談談話の構造、聞き手の配慮に見られる傾向を示した。しかし、聞き手の発話行為に関しては行為の機能についての分析のみで、発話形式には触れていない。そこで今後の課題として、発話行為における発話形式の分析をあげる。発話行為とモダリティの観点から分析を試みたい。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」
- 柏崎雅代・足立さゆり・福岡理恵子 (1997) 「インフォーマルな『と』相談における提案の分析」『日本語教育』92 60-72
- 北口信行 (2010) 「慰めの言語行動—談話における『情報要求』発話に注目して—」『日本語・日本文化研究』167-180
- 熊取谷哲夫・村上恵 (1992) 「表現類型に見る日本語の助言伝達」『表現研究』55 28-35
- 鈴木香子 (1995) 「内容区分調査による『話段』認定の試み」『国文目白』34 31-48
- _____ (2002) 「ラジオの医療相談の談話の構造分析」『早稲田大学日本語教育研究』1 117-130
- 鈴木香子 (2003) 「ラジオの心理相談の談話の構造分析」『早稲田大学日本語教育研究』3 57-69
- 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 星野祐子 (2005) 「日本語の相談場面におけるポジティブ・ポライトネス」『人間文化論叢』8 317-326

ポリ・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』 くろしお出版

Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.

Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974) “simplest systematics for the organization of turntaking for conversation.” *Language*, 50, pp.696-735

Tannen, Deborah. (1990) *You just don't understand: Women and men in conversation*. New York : William Morrow.

(佐藤綾香 江原外国語高等学校 · tiffany_as0120@yahoo.co.jp)